



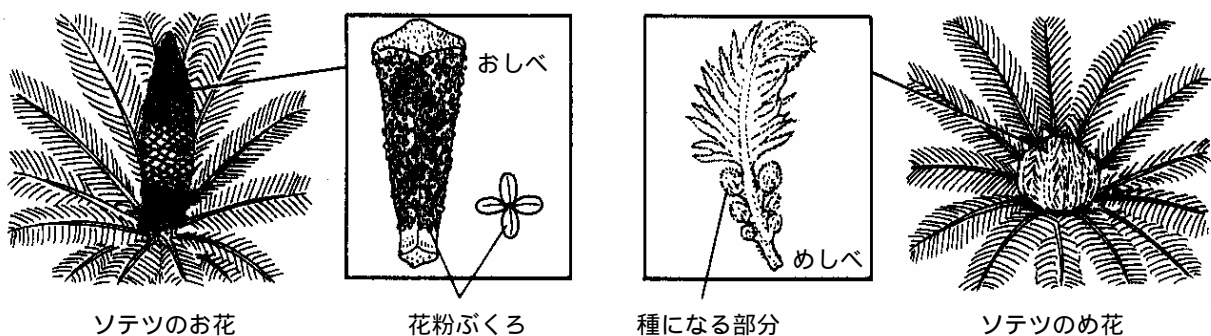
種は、最初は どうやってできたの

最初は、種のかわりに孢子でふえた

地球に現れた最初のころの植物として、32～35億年前の「も」の化石が残っています。長い間に、単純なつくりのものから、複雑なつくりの植物へと進化し、種類も増えていきました。やがて、水中から出て、地上で生活するシダやコケのようなものが現れ、さらに、ソテツやイチョウのような植物が生まれてきました。シダやコケは、種はありません。でも、種のかわりに、粉のような「孢子」をつくり、それを空気中に飛ばしたり、水の流れにのせたりして、仲間をふやしていきます。

花がないと、種はできない

この孢子から、もう一つ進んだ形で、お花の花粉と、め花から種ができるようになったのが、ソテツやイチョウ、マツなどの仲間です。2億年前ごろの、これらの花の化石が発見されています。これらの花は、花びらはなく、種になる部分が子房などで包まれていない、はだかの形のため、裸子植物とよばれます。このソテツなどが現れる前に、シダの仲間の中に、種のようなものを作るものが現れたと考えられています。これが、最初の種を作る植物だったようです。（監修・矢野 亮）



ソテツのお花

花粉ぶくろ

種になる部分

ソテツのめ花

